

# 01. 恋と病熱

走は溜息を吐いた。

一体これで何度目か、眉間に皺を寄せ斜め上の天井を見上げる。

「走」

くすくす笑いながら清瀬が走の手を取った。優しく握り込み、落ち着けと細めた瞳で語りかけてくる。繋いだ手が嬉しいのと露骨に迷惑そうにしている顔を見られてしまった恥ずかしさから走は頬を赤らめた。

ふたりは走の二三号室にいた。部屋の中央にハの字のように座っている。足が冷えないように清瀬の膝に毛布を掛けてやったら、「君も入れればいい」と走の膝の上にも毛布は広げられた。

暑いどころか寒いのにドアをきちんと閉めてないのは、常にブレーキが壊れがちな走に対する予防措置だ。誰かがふとした拍子に覗き込むかもしれないという心理的拘束によって清瀬に対して不埒な真似を働き難くしようとしている。実際はその空間にその瞬間誰もいなくて清瀬が偶々背を向けてうなじが見えた、それだけでも走はあっさり暴走するのでこれまでの行いを鑑みるとあまり効果があるとは思えない。

だが、今日だけは例外だった。